

## 広島県所在の高麗鐘について

はじめに

寺院において鐘の音は“人を集める”と共に“時を知らせる”という役割では東西洋が大体似ていると思う。韓国の寺院における梵鐘の音は、この二つの用途以外にも衆生済度のための仏音の象徴である四物（梵鐘、法鼓、雲板、木魚）の一つとして地獄の衆生を救うという意味を持っている。広島市内にありながら町中に広がる身近な不動院の鐘の音、その梵鐘が高麗鐘であることを知っている一般人は思ったよりも少ないかも知れない。不動院の鐘を含めて、照蓮寺に所蔵されている鐘、宮島の大願寺に所蔵されている鐘など、総3口の高麗鐘が広島県内に存在していることを知り、論者はこれまで研究されたこれらの鐘に関する資料調査の収集や現地での実測調査を行った。本稿では韓国鐘の流れの中でこれらの梵鐘が占める位置を把握するために各梵鐘の様式的特徴と歴史的な背景について

調べ、また日本鐘と韓国鐘との特徴を比較することで韓国鐘が持っている特徴の理解を助けた。

李 恩 和

本論に入る前に韓国鐘という名称について簡単に言及して置きたい。日本では韓国の鐘を高麗鐘、または朝鮮鐘と呼んでいる。韓国では高麗鐘は高麗時代の鐘として、朝鮮鐘は朝鮮時代の鐘として歴史上のある時代の鐘の意味として使われているのに対して、日本では高麗鐘も朝鮮鐘も大体韓国の鐘という意味として使われていることに注意しなねばならない。偶然にも広島県内に存在する3口の梵鐘は全部高麗時代の鐘であるため、本稿では高麗鐘という名称のみを使ってもよい状況ではあるが、本稿の中で論者が高麗鐘と定義するものは韓国鐘の中でも統一新羅時代に次ぐ高麗時代の鐘であることをもう一度言及して置きたい。

## 日本鐘と韓国鐘の特徴

韓国鐘について論を進める前に身近なところにある日本鐘の特徴について簡単に目を通す必要があると思われる。

日本鐘はコップを逆さまにした形をしており、その上に二つの竜首の頸を接合したような半環状の両竜の竜頭がついている。鐘身の全面にわたり、縦横に走る帯状の文様で区画がつけられている。それが僧侶の袈裟に似ているため袈裟襷けさたすと呼ばれている。乳の数は4段9列、6段6列が主となっているが韓国鐘のように決まりはないようだ。撞坐は鐘を撞くところで蓮華文として飾られていて、縦帯と中帯とが交差する2ヶ所に設けられるのを通例とする。鐘の下段の部分は馬の爪のように突出しているため、へ駒の爪と名付けられているのが日本鐘の簡単な特徴である。<sup>(1)</sup>

韓国鐘の主な特徴としては日本鐘での竜頭に当たる龍鈕、音管、天板、上帯・下帯、乳廓（或いは乳郭）と乳、飛天・仏菩薩像などをあげることができる。

龍鈕は中国鐘や日本鐘が頭を二つ持つ両竜となっているのに対して、韓国鐘の場合は頭が一つの単竜となっているのが大きな特徴の一つである。単竜様式は中国や日本では見られない韓国鐘の特徴であるが、高麗時代が終わり朝鮮時代に入ると、中国の影響を受け段々日本と同様の両竜へ変化していく傾向を見せる。そのため、竜の形

は高麗時代の鐘と朝鮮時代の鐘を区別させると共に、また韓国鐘であるかどうかを区別するときの重要なポイントとなるのである。また、竜の姿が最初は写実的で彫刻的な形態から段々抽象的で雑に変化していく姿から時代的な様式変化を推定することもできる。

その次、音管と天板について説明すると、音管とは龍鈕の後ろ側に密着して設けられている煙突状の部分を指す。音管以外にも円筒音筒、甬筒などの名称として呼んでいるが、日本では「旗挿」、または「甬」と呼ばれている。笛、またはパイプのような形をしている音管は、鐘の天井部分に当たる天板にまで貫通しているため、鐘の内側から見上げてみるとその穴が確認できる。音管は中国鐘や日本鐘には見られない特徴であるため、学界には音管を巡った様々な説が発表されている。<sup>(2)</sup> 音管の起源と関連しては韓国現存最古の歴史書である「三国遺事」に登場する「万波息笛」説話との関連性をあげることができ、機能と関連しては音響効果を高めるための一つの手段であったという研究が注目される。音響効果については後でもう一度言及したい。

上帯と下帯は、日本鐘の袈裟襷に当たり、中帯はなく鐘身の上の部分と下の部分に華麗な唐草文などで装飾されているのがその特徴である。また唐草文帯で装飾される乳廓とその内側に設けられる乳は3段3列でその数が決まっています。乳頭が突起したものもあれば、平らなものもある。突起したものは大体蓮蕾形をしており、平らの

ものは満開した蓮華の文様をしていて、一般的にボタン形乳と呼ばれるが坪井は著書で座乳と名称している。中帯のない鐘身の空いた空間には撞座と飛天などが施されるが、高麗前期まで現れる飛天は時代が下ると段々仏・菩薩像などへと変化していく傾向が見られる。以上が日本鐘と韓国鐘の簡単な特徴である。

### 韓国鐘の音響効果について

ある物が音を出した時、私たちの耳はそれをすぐ感じる事ができるのではなく、音を出す主体である発音体の振動が空気を振動させ、また空気の振動により耳の鼓膜が振動し脳に伝達され、やがて音として感じる事ができるという。西洋鐘とは違って東洋鐘はその低い響きが長い時間、また遠くまで到達するのが長点である。しかし、同じ東洋圏であっても日本鐘と韓国鐘は鐘の架ける高さと形態に差がある。日本鐘は地面から3〜4メートル上の高い位置に鐘を架け、撞木の下へ紐を垂らして、下で鐘を見上げながらその紐を持ち撞木に反動を与えて打鐘する。しかし韓国鐘は地面から鐘口までの距離が僅かである。鐘の大きさと鐘閣の形態によっても少しずつ差を見せるが、地面から10〜30センチ程上に鐘口がくるように架けるのが一般的である。また鐘口下の地面に鳴洞という大きな穴を掘るか或いは大きな甕を埋め、内側に長い楕円形の空間を形成し、

鐘の音はその空間を共鳴するようにするのである。梵鐘の共鳴効果を高めるため甕を埋めるのは、日本の能舞台の床下に甕を置いて音がよく響くようにするという話と通じるところがあるのではなからうか。

音響効果と関連して韓国鐘のもう一つの特徴は音管部分である。鐘の内部を共鳴した音は天板の穴から音管を通り外へ抜け出すのだが、ある研究によると鐘の内部を共鳴する音波が音管を通る間音響を増すことも認められるが、それより騒音と雑音を減らす音響フィルター(acoustic filter)の役割がもつとも期待されるという。

### 高麗鐘の時代別数量と時代区分について

現在韓国最古の鐘は統一新羅時代に造られた上院寺鐘(七二五年)で、その次が「エミレー鐘」として有名な聖徳大王神鐘(七七年)である。統一新羅時代の鐘、省略して新羅鐘とも言うが、現存する完形の新羅鐘の数は韓国内に3口、日本には4口<sup>(5)</sup>である。そして、高麗鐘は韓国に106口、日本に51口、フランスに1口、また北朝鮮に1口が調査されている。

高麗鐘の数をもう少し詳しくみると、高麗前期有銘鐘は総14口で、韓国に3口、日本に11口あり、前期無銘鐘は総30口でその内10口が韓国に、20口が日本に、残りの2口が北朝鮮とフランスにあると報

告された。高麗後期有銘鐘は総33口で、その中25口が韓国に、8口が日本にあり、後期無銘鐘は総110口の中で78口が韓国に、32口が日本にあると調査された。広島県内にある3口の高麗鐘は竹原の照蓮寺鐘が高麗前期の有銘鐘で、広島市内にある不動院の鐘が高麗前期の無銘鐘、宮島の大願寺の鐘が高麗後期の無銘鐘である。

その数が少ない新羅鐘もそうであるが、高麗鐘も本来その鐘を鑄造した寺院から離れ流伝を繰り返して、現在保管されている位置に辿り着いたのである。韓国の梵鐘は歴史上の様々な戦乱の中で何回も受難を受けた。高麗・朝鮮時代にかけて日本人倭寇の略奪があり、壬辰倭乱（一五九二～一五九七）の際にも寺院が焼け数多くの鐘が亡失し、略奪された。朝鮮時代には国内的に廃仏崇儒の政策で仏教界自体が衰退され梵鐘製作が不振し、更には梵鐘を集めて貨幣や銃砲を製作する際に使われた。日本の植民地時代には戦争に使うため、梵鐘や香炉、蠟燭立てのような寺院の儀具など、そして一般家庭で使用していた食器や度具など、各種の青銅合金製のものが回収され弾皮や武器製作に使用された。また韓国戦争（一九五〇～一九五三）の際にも数多くの寺院が焼けてしまい、その時多くの梵鐘が亡失されるか、または土の中に埋められ戦禍を免れたのである。

やがて戦争が終わり、全国で戦災復興事業が行われた。その復興事業の中で営利を目的として、戦時中に使われた地雷探知機を利用し、屑鉄を集める人々が全国に次々と現われた。その過程で土の中

に大事に埋められ戦禍を免れた鐘、或いは戦時中砲弾に打たれ壊れてしまった梵鐘の破片などが数多く発見されたのである。韓国鐘は骨董品収集家たちが好む対象の一つであったため、いつ密売されその姿を消すか分からなく、とりあえずその形態だけでも把握して置こうとした緊急調査が行われた。これらは短い調査報告書としてまとめられたが、中には既にその姿を消した資料も含まれていて韓国鐘の研究において貴重な資料となってくれるのである。

広島県内にある高麗鐘の様式部分にも出てくると思われるが、美術史的に高麗鐘を分類する時には大きく高麗前期様式と後期様式に分けるのが一般的である。前期鐘は高麗が建国された九一八年から一一四六年までの二二九年間を指すが、銘文のある有銘鐘の場合は外国との政治関係で外国の年号を使用しているのを確認することができる。様式的には新羅鐘と比較して少し差を見せるのだが全体的には新羅鐘の形式を受け継いでいる。

後期鐘は一一四七年から高麗が滅亡する一三九二年までの二四六年間の間に造られた鐘を指す。この時期は外国の年号に代わり、独自の干支で紀銘を表す物が多い。後期鐘の形態上の特徴としては鐘肩部分に現れる立状帯をあげることができる。特にこの立状帯の有無で前期の鐘と後期の鐘を区別することが多い。

広島県所在の三つの韓国鐘について

1 照蓮寺藏鐘（竹原市竹原町）——高麗前期（九六三年）（図1）

総高：60.4 cm 口径：41.5 cm

調査当時は住職がお住まいになっていない建物の応接間と思われるところに置かれてあった。畳の上に座布団を敷き、その上に鐘を安置していた状況だったのである。

全体的には丸みのあるどっしりとした感じで、飛天の姿は子供が描いたような天真爛漫な雰囲気のある鐘である。各部分の文様が元の位置から少しずれているところが何ヶ所かみられることと、音管の形が（ロウソクがその炎に解け落ちるように）崩れていること、そして天板が鐘全体の重さを支えるには極めて薄く、3ヶ所に穴が空い

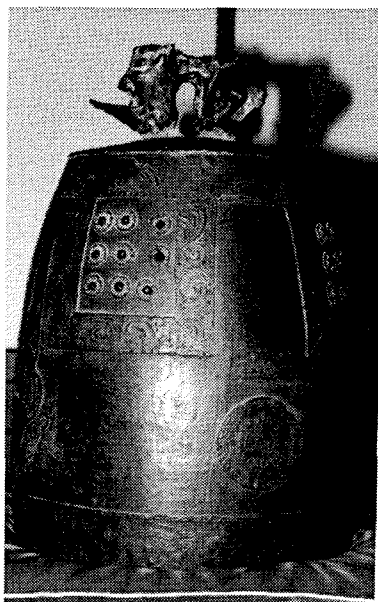


図1 照蓮寺の高麗鐘

ていることから製作過程での失敗も予想される。製作過程での失敗の原因としては製作の最終段階で銅が不足したため鐘を完成させることができなかったのではないか。日本とは違ってその量が少ないため、韓国において「銅」は、貴重品であった。それは朝鮮と日本の主な貿易品の一つが銅であったことから分かる。製作過程で失敗があつたら最初から造り直すのが通例であるにも拘らず、そうすることができなかったというとは何か当時の切迫した状況も想像させてくれる。そして、もう一つの推測としては鐘が懸けられた建物の火災により、龍鈕や音管などの鐘の上部が解けてしまったのではないかということである。しかし、そのいずれも論者自身の個人的な推測に過ぎない。

この鐘の重要な特徴として表側にある陽刻の銘文をあげねばならない。多くの鐘が銘文や関連記録をあまり残していないし、銘文があるとしても陰刻の銘文は後代その必要性により付け加えられる場合が多いのである。そのため、その内容から様式分類に必要とする資料を探るのは極めて難しい。しかし、照蓮寺の鐘のように信頼度の高い陽刻の銘文から九六三年という絶対年代と霊岩（銘文の原文では古弥縣にあたる）という鐘の製作地が分かると、年代判定と文様の地域性に関して一つの基準となる資料を得られるので、それに対する期待を増すのである。<sup>6)</sup>

この鐘が現在の位置に置かれるまでの由来については大きく二つ

の説が考えられる。その一つは瀬戸内海を通した朝鮮との貿易で買  
い求めたものである説である。もう一つは朝鮮出兵からの戦利品で  
あるという説である。前者の「貿易品」説の可能性も否定できな  
いが、鐘としての機能性がなかったため後者の「戦利品」説の方が可能性  
としてより高いと思われる。<sup>(7)</sup>

2 不動院鐘（広島市牛田新町）——高麗前期（図2）

総高：110 cm □径：65 cm 余

不動院の鐘は銘文がないため、その製作年代が分からない無銘鐘  
である。しかし、龍鈕の竜の顔が統一新羅の竜の顔と比べ多少硬い  
感じがするものの、竜と音管の古式的で充実な表現など、この鐘が  
統一新羅の鐘、即ち新羅鐘の伝統を次ぐ高麗前期の鐘として認めら  
れている。前の照蓮寺鐘と比べ、同じ高麗前期の鐘でありながら全  
体的にもっと力強い感じがする鐘で、実際、寺の鐘樓に懸けられ現  
在も使われている保存状態も非常によい鐘である。この鐘の調査研  
究の際、論者が一番注目したのは鐘に施されている文様であった。  
例えば飛天の姿や撞座の文様、そして乳廓の下の部分に接して施さ  
れている二条の紐などである。

乳廓と乳廓の広い空間を雲の表現も無く、天衣をなびかせながら  
斜めに下降する飛天のポーズや腕の位置の不自然さは論者にとって  
見慣れないものであったし、文様もその大きさも異なる2種類の撞

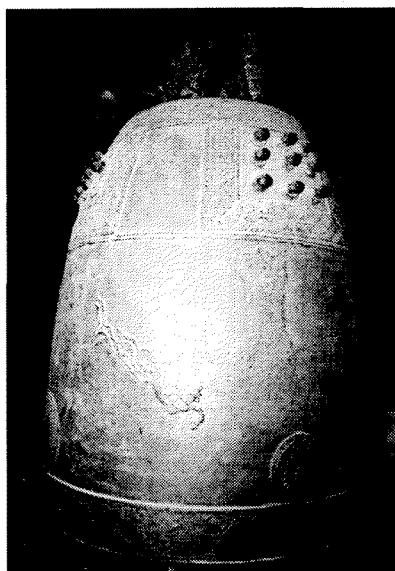


図2 不動院の高麗鐘

座——大きい方は満開の蓮華文で、統一新羅時代の遺跡から発掘さ  
れた飛天の文様に類似し、小さい方は満開の蓮華文の中央に「信相  
菩薩」という銘文と共に仏坐像、或いは菩薩坐像の姿が見られるも  
のである——も、一般的に他の鐘では見られない特徴である。飛天  
と撞座の文様を分析した結果、この鐘に施されている飛天の文様は  
発掘された統一新羅時代の平瓦の飛天文と非常に似ていることが分  
かった。そして、撞座の文様もまた同じく統一新羅時代の円瓦で見  
られる文様の雰囲気と類似性を持っていたため、この鐘が統一新羅  
の文化が色濃く残っている慶州あたりで铸造されたのではないかと  
推定するようになったのである。しかし、乳廓の下の部分に接して  
施されている二条の紐は朝鮮時代の鐘で見られる様式の一つで、ど  
うして高麗前期の鐘からこのような紐文が見られるのか、未だに論



図3 大願寺の高麗鐘

者に解決できなかった課題として残っているのである。

不動院鐘の由来に関しては「文祿の役」の際、朝鮮出兵に出陣した惠瓊が朝鮮から木材と鐘を持ち帰ったという意見のみを耳にしている。実際、楼門の二階の尾推には「朝鮮木文祿三(一五九四)」という刻銘が4ヶ所にあるし、寺の資料からもその内容がうかがえる。

3 大願寺鐘(広島県佐伯郡宮島町3)——高麗後期(図3)

総高: 38.5 cm □径: 22.5 cm

現在は金堂に向かって左側のテーブルの上に「朝鮮の古代酒壺(豊臣秀吉 寄進)」と並んで「朝鮮鐘」というお札と共に安置されていて、本堂の外からもみることができるようになっている。大きさは総高が約38cm位で、鐘身は23cmをはかるに過ぎない小鐘である。

る。全体的には保存状態もよい方であるが、龍鈕を少し揺らしてみるとガタガタと音がしたので龍鈕がいつか本体から外れる恐れがある。この鐘は形と各部分の文様から高麗後期のものであると認められているが、その一番大きい特徴の一つ前にも言及したように高麗後期鐘でのみ見られる鐘肩の立状帯と飛天の代わりに鐘の腹部を巡らしている仏立像と四天王と推定される人物たちの表現である。

また、「元曉庵小鐘」という陰刻の銘文から、もともとは大きい寺院に付属しているか、或いは僧侶一人か二人が修行のため生活する小さな寺(小庵)の鐘であったと推測される。実際、この位の大きさの鐘は外側に懸る用途ではなく、本堂の片隅に置かれ毎日の仏教儀式の際に使われるのが一般的である。

この鐘もまたその由来が明らかではないが、二つの説がある。その一つは文祿・慶長の役の際、豊臣秀吉が朝鮮から齎して大願寺に寄進したという説である。もう一つは一五四〇年大願寺の住職であった尊海上人が一切経を求めて朝鮮に渡ったが、一切経は手に入れず、代わりに政府から様々な贈り物を貰って帰ってきて、その贈り物の一つがこの小鐘であるということである。「大願寺尊海渡海日記」という記録が残っていて、その内容を見てもこの鐘に関する記録はみることができなかったもので、一般的に言われている文祿の役の戦利品であるという説がもっと説得力があるのではないかと思う。

終わりに

以上、日本鐘と韓国鐘の特徴や広島県内にある3口の高麗鐘の形態と歴史的内容について述べてみた。韓国と日本は古くから様々な意味で深い関係を保ち続けてきた。日本の様々な所にその名を残している新羅や百済の文化もそうであり、仏教文化が朝鮮半島から日本に初めて紹介されたことも、また朝鮮通信使や釜山港を始めとした何ヶ所の港での貿易がそうである。勿論、韓国人の認識の中には壬辰倭乱や日本植民地時代の痛い後傷が未だにへ近くて遠い国<sup>9</sup>というイメージとして残っているのが現実ではある。本稿で取り上げた広島県内にある3口の高麗鐘はその由来を巡って、過去私たちが歩んできた韓国と日本、或いは韓国と広島との歴史的な関係の一面を見せてくれるのではないかと思われる。

そして、広島の高麗鐘を調査する過程で三原市の妙正寺鐘<sup>10</sup>について興味深い話を聞き、直接確認するために妙正寺を訪ねた。鐘の高さは1・10メートル、口径は64センチの大鐘に近い鐘で、音管があり、唐草文の上帯や下帯と乳廓と3段3列の乳を持つている韓国鐘の特徴を持っていた。しかし、龍鈕と音管部分から何故か違和感のようなものを感じた。その原因は龍鈕と音管とが互いに密着せずに並んで独立していたからであり、また龍鈕の形も単竜ではなく頭を二つ持つ両竜の半環状の竜頭であるのが韓国鐘と異なっていた。

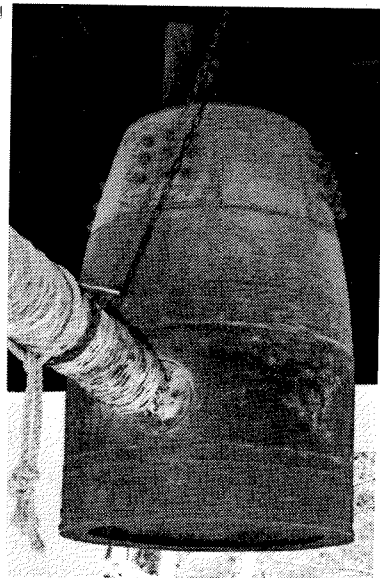


図4 妙正寺の日本鐘

案内文によると天正四年（一五七六）に铸造されたもので、江戸時代以降、三原鋳物師として史上に名を残した竹原屋初代吉井信正の作であると記している。鐘の細部表現や鐘身にある銘文<sup>10</sup>の内容などから間違いなく日本鐘であることが分かったが、壬辰倭乱が起きる10余年前の三原市で、なぜ当朝鮮で造られていた変形様式ではなく伝統様式の韓国鐘を真似た日本鐘が造られるようになったのかはとても興味深い問題であると思われる。

注

- (1) 杉山洋「日本梵鐘の様式的特徴と変遷」『聖徳大王神鐘——総合論考集』国立慶州博物館、1999、pp. 286～315 参考
- (2) 韓国鐘においてもっとも異論が多いのがこの音管の部分である。韓国鐘が音管をもつ理由に関しては様々な説があるが、それらは以下の



ようである。

- ① 中国の古銅器である甬鐘の甬を真似したものである説
  - ② 音律を調節する役割を持っているという説
  - ③ 単純に装飾として付けたものであるという説
  - ④ 龍鈕の強度を増加させる補強の役割を果たすという説
  - ⑤ 統一新羅の伝説の聖宝である万波息笛から由来したという説
- 特に①と⑤は韓国鐘の起源をどこに求めるかという問題、ひいては音管部分を何と呼ぶかという問題に深く関わっている。甬或いは甬筒という名称は韓国鐘の起源を①において考える立場であり、音管或いは音筒という名称は⑤に起源を置くか②のような音管の役割を主張する立場である。筆者が本文で音管という名称を使用しているのは②と⑤の説を認めるからである。

- (3) 万波息笛とは、三国統一の主人公である文武王(六六一〜六八〇)が、死んだ後東海の高麗となり、その息子である神文王(六八一〜六九一)に国を守る大宝として授けた竹で作った不思議な力のある笛である。

- (4) 廉永夏 『韓国の鐘』ソウル大学校出版部、1998、pp. 86〜87

- (5) 〈在日新羅鐘〉
  - ① 靑州蓮池寺鐘(八三三年)——福井県敦賀市松原村 常宮神社所蔵
  - ② 松山村大寺鐘(九〇四年)——大分県宇佐郡 宇佐八幡宮所蔵
  - ③ 雲樹寺鐘(八世紀後半)——島根県安来市清井町 雲樹寺所蔵
  - ④ 光明寺鐘(九世紀後半)——島根県大原郡貨茂町大竹 光明寺所蔵

伐  
昭大王當縣聆規沙干  
峻豊四年癸亥九月十八日古弥縣  
西院鑄鐘記

徒人名疏同院主

人領玄和尚信嚴

長老?玄上坐

欣直卿?又言卿?

大百士

羅州只未百士

高麗第4代目光宗の時、郷官の聰規が光宗即位15年(九六三)に全羅南道靈巖郡にある西院というお寺の鐘を鑄造した。鑄鐘発願徒としては西院の住持「領玄和尚」、長老「信嚴」、上坐「?玄」、その他二人で、鑄工匠は羅州の只未であるという。(藤田亮策「高麗鐘の銘文」朝鮮学報14 朝鮮学会、1959、pp. 194〜196、坪井良平「朝鮮鐘」角川書店、1974、pp. 80〜81 参考)

- (7) 〈照蓮寺鐘の由来に関する資料

①「眼前に大三島その他の島々があり、古来海賊衆の根拠地であったので、こちらの船乗の寄進か、領主と関係あるか不明」という。(藤田亮策、1959、p. 194)

②小早川隆景(一五三三〜九七)が朝鮮出兵に際して持ち帰り、幼時の学問所であった本寺に寄進したと伝えられる朝鮮鐘である。

〔広島美術と文化〕学習研究社、1984、p. 283〕  
中世には定林寺という禅宗寺院であったのだが文祿(一五九二〜九五)の頃、寺堂は荒廃していたが慶長八年(一六〇三)に真宗に改め、また龍頭山照蓮寺と改称、延宝二年(一六七四)に浄土真宗西本願寺末寺となった。(太田雅慶「安芸の小京都―たけはら」株式会社ブレーン企画、1994、pp. 40〜41)

- (8) 〈不動院鐘の由来に関する資料〉

①「不動院はもと安国寺と称したが、文祿中住僧惠瓊が本寺を広島市内に移して後、その旧棲を不動院と号するに至った。この寺の鐘楼

に懸る鐘は、惠瓊が征韓役に彼地から招来したものであると伝えられる。古く伊東忠太の注意を惹いて以来著名な鐘の一つである。」  
 (坪井良平、1974, pp. 112~113)

②「惠瓊二十五歳の時、正式に安芸安国寺の住職となる。後に東福寺、南禅寺の住職にもなり、中央禅林最高の位に就いた。惠瓊が秀吉公の命で朝鮮の役に出陣し、この鐘と木材などを持ち帰った。秀吉公が没し、やがて戦国乱世の終わりを告げる天下分け目の関ヶ原の戦いにおいて惠瓊は西軍に組して敗れ、石田三成、小西行長と共に、京の六条河原で斬首にされ、六十三歳の波乱に満ちた生涯を閉じた」  
 (不動院案内の葉から。姜健栄「梵鐘をたずねて」(株)アジアニュースセンター、1999, pp. 55~56 から再引用)

(9) <大願寺鐘の由来に関する資料>

「これほど小さな鐘はほかに少なく、それだけに貴重であると、最近韓国から来られた教授に指摘された。先祖からはこの鐘の伝来を、秀吉の朝鮮役の際に、退却して無人となったお寺の土中に埋められていたのを日本に持ち帰り、この鐘を打ち鳴らすことで両軍の戦死者を供養していた」(大願寺 住職の母堂の話から。姜健栄、1999, p. 56 から再引用)

(10) <妙正寺銅鐘の銘文の原文>

「日本第一唐 安芸州 小早川拾遺隆景公之智臣 井上伯耆(?)  
 藤原春忠 鑄之者也 噫 ? 天正八年丙子花朝吉日 人工竹原屋吉  
 井左衛門尉 信正」

(イ・ウンファ 広島大学大学院)